

## 524) 独言

通勤する電車内のことである。そいつはオイラの目の前に座っていたが、なぜか良く独言を言う、うるさい奴だった。「ウーンそーか。……これでよしとッ。」  
「それに…あーそーか、先に〇〇に行って、それから□□の方がいいか。」どうやら今日一日の行動の順序をいろいろと検討しているらしい。そんなこといちいち口に出さなくてもいいのに、変なところに立ち上がったが、通勤ラッシュの電車のこととて、吊革の空いているところが、そこにしかなかったのである。やがて赤羽まで来ると「よし！行くとするか。」とあって、かけ声もろとも、そいつは勢い良く立ち上がった。いや、良かった良かった。これで静かになるばかりか、上野まで座って行ける。オイラは内心ほっとしていると、この独言男は立ち上がるなり、オイラの耳元で何か囁くのである。オイラは一瞬ヤバイと思いつつ「はっつ！」というのと、再び小声で何か言うのではないか。よくよく聞き耳を立てるように聞いてみると、「ファスナー！、あそこのファスナー空いてますよ！」というのである。「ヤバイ、ヤバイ！」確かに空いていた。考えてみればあいつはその位置からして、オイラの股間が目の前に見えていて、何時そのことをオイラに言おうか、あいつなりにかなり緊張していたんだらう。独言も、もしかするとその緊張感によるものなのかも知れなかった。「イヤー、スマンスマン、お気にかけていただいて。それにしても会社までそのまま行かなくて良かったよ。ありがとうよ！」同じサラリーマンだもんなー。助け合い助け合いッと。